KÔKÛTSUKI

航空知識

滞　歐　雜　記　帳（その九）

工學士　山　本　峰　雄[1]

8. 漢堡造船研究所後援協會大會

靜かに華かな伯林の春を送り，北國の緩かな夏を迎へようとする時漢堡造船研究所後援協會の第18回大會が，漢堡，ウエスターランド，キール及び伯林で開催せられた。後援協會は正式の名前は漢堡造船研究所朋友及賛助員協會（Die Gesellschaft der Freunde und Förderer der Hamburgischen Schiffbau-Versuchsaustalt）と云ふ名前である。今年は特に漢堡造船研究所の創立廿五周年記念を兼ね，且つは伯林の造船協會（Die Sehiffbautechnische Gesellschaft）と聯合して盛大なる大會を開き，猶リリエンタール航空研究協會（Die Lilienthal-Gesellschaft für Luftfahrtforschung）も此の趣旨に賛成して，特に航空日を設けて獨逸航空研究所（DVL）や伯林のテムペルホーフ新飛行場の見學，遊覽飛行等に參會者を招待する事になつて居る。

第1圖　漢堡フエア・ハウス（著者）

外國で之に參加を申込んだ者は日本の外に英，米，佛，伊等の一等國の外に，丁抹，瑞西，波蘭，エストニヤ，ノールウエー，瑞典，和蘭，白耳義，ハンガリー等の歐洲の小國の外にユーゴー，ルーマニヤ，ブルガリヤ等のバルカンの諸國，外につい先頃獨逸に併合されたチエコ及びダンチヒから遠くは南米アルゼンチン，さては支那迄を含む，全世界廿一ケ國に達し，其の參加人員は夫人，令孃，令息を加へて實に955人の多數である。

流石に漢堡を始め，ブレーメン，ウイルヘルムスハーフエン，キール等の造船地の人々が壓倒的に多數を示して居るが，航空關係者では航空省局長でリリエンタール協會事務總長を兼ねるボイムカー氏，ブロームウントフオスのフオークト氏，ハノーバー工科大學航空學科のプレル教授，佛國航空大學教授ロアイ氏，トラーウエ・ミユンデの獨立空軍水上機審査所の職員の顔も見える。本來の造船關係者としては漢堡造船研究所々長ケンプ博士，漢堡造船研究所後援協會事務總長フエルスター博士を始め，英，佛，伊の各造船研究所長，獨逸海軍の總帥レーダー提督を始め海軍の主腦部，各造船所の職員が參加し，此の外に船舶用機關，補器類の製作者は全てを網羅して居る。

（1）航空研究所

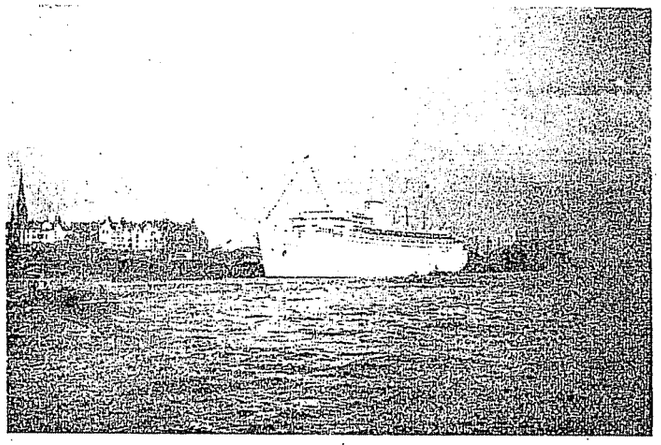
我國からの參加者は日本海軍の青年將校と筆者及商社から一人である。

歐洲へ來て羨しいと思ふ事は總ての會合が國際的である事である造船所の學術會合に限らず，リリエンタール協會や獨逸航空研究學士院の會合，滑翔飛行の學術大會等全て國際的會合として催されて居る。歐洲の各國は勿論，遠く米國からも參加して，常に國際的レベルの上に立つて自己を磨き勵まず機會に惠まれる。又將來の傾向もお互に意見を交換して居る内に洞察する事が出來る。特に學者技術者の學術的討論を通して目標をつかむ事が出來る。彼を識り，己れを知るから，やたらに世界一だとうぬぼれる事も無いと云ふ譯である。

スポーツにしても伯林でアイススケートの大會が開かれると倫敦から，ストックホルムから更に遠くはシカゴから各國の選手權保持者が集まる。倫敦に拳闘の試合があると逆に獨逸や佛國から選手が集まると云ふ具合で選手も張合があるし，觀衆は更に面白い。

我國は地理的に惠まれないから種々の會合も國内的になつてしまふし，又外國の會合に參加する機會が少ないと云ふ事になり，うつかりすると世界の進運から遲れる心配がある。

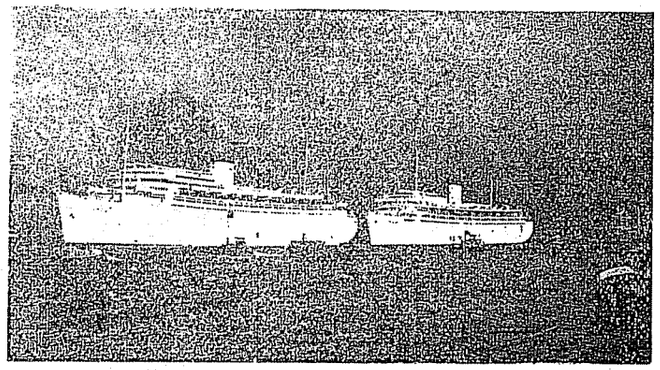
6月13日7時37分レーアター驛發の特急列車フリーゲンダーハンブルガー號で漢堡に向ふ事となり，2人の先輩と同車する。夜會出席用の服を埋込んだ大きな旅行鞄を車内に持込み恐ろしく贅澤なクツションに身を埋めて居ると外に顔見知りの友人2人が乘込んで，日本人は都合5人となつて賑かなグループが出來上る。



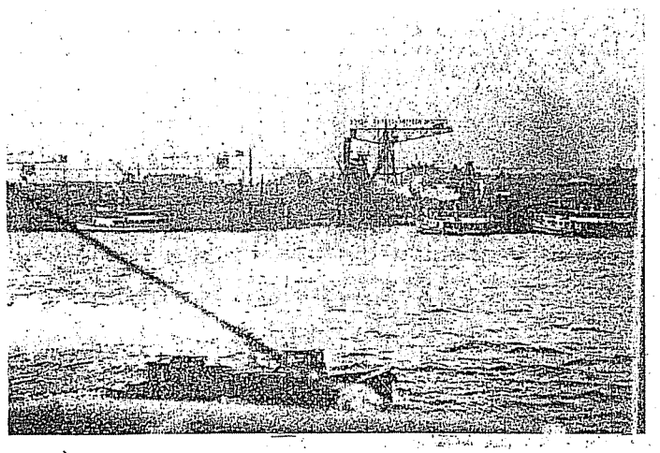
第2圖　KdF 艦隊旗艦ロバート・ライ（著者）

最近迄世界最高速の列車として最高時速160粁の快速を出す此の列車も走り出して見るとスプリングの緩衝作用とクツションが厚い爲に動搖や振動を殆んど感じない。米國サンタフエ鐵道の不銹鋼製デイーゼル列車「チーフ」號或はユニオン・パシフイツクの全ヂエラルミン製デイーゼル列車「シテイ・オブ・ポートランド」號等に比較すると雲泥の差である。軌條がよくて平坦地を走るせゐでもあらう。北獨逸の平原や牧場が猛烈な勢で後ろに飛んで行く。

レーアター驛からハンブルグ驛迄293.3粁を無



第3圖　漢堡におけるKdF艦隊の2旦船，前方ロバート・ライ，後方ヴイルヘルム・グストロフ



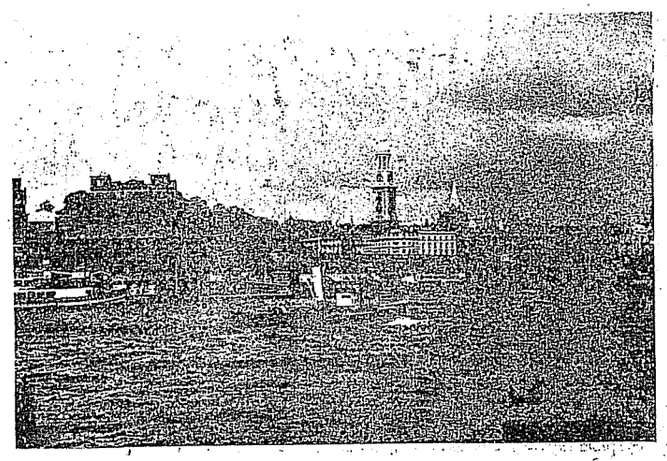
第 4 圖　漢堡の工業地帶　（著者）

停車で飛ばして2時間半の後に我々はアルトナ驛に着いた。時速 69 粁の我國の特急列車に乘つけた我々には珍しい經驗であつた。

アルトナの驛に荷物をあづけてタクシーで今日の會場であるハンジツシエン大學にかけつける。既にケムプ博士の講演が終りに近づきつゝある。演壇の上に見るケムプ博士は數年前日本で見た時と少しも變らない。漢堡造船研究所の過去廿五年に亘る研究の業績を幻燈で説明する講演が終つて盛んな拍手が起つた。其の業績を稱へ獨逸海軍擴張の重要なる時期に於ける此の研究所の重大なる任務を暗示する樣に演壇の正面に飾られたハーケンクロイツの旗を背にしてケムプ博士は微笑を以て拍手に答へた。欄間を廻つて參加各國の國旗の列が美しい花模樣を繰展げて居る。見れば我國の旗が見えない。何度見廻しても廿二の旗の中には懐しい日章旗が無い。友人の誰もが祖國の旗を豫期して壁を見廻すのであつた。續いて「造船に於ける二，三の新問題」と題する講演がブローム・ウント・フオス造船所のヅユヒテング氏に依つて行はれ，更に造船研究所の2人の所員に依つて講演が行はれて，今日の講演の幕を閉じたのである。

フエルスター博士が立つて午後の見學の注意事項を讀上げ，續いて自ら英語に譯して再び讀上げる。續いて通譯者が美事な佛蘭西語で讀上げる。國際會議らしい風景である。

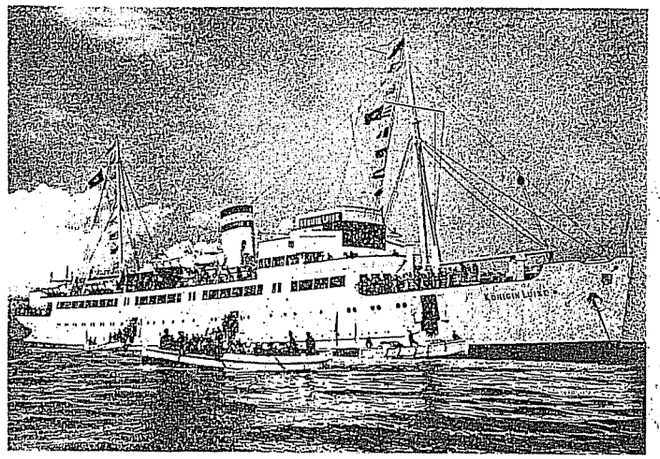
大學を出て各自思ひ思ひに電車やバスやタクシーで晝食場に當てられた漢堡の漢堡・アメリカ汽船會社の埠頭に向つて立つ古いフエアハウスに向ふ。見晴らしのよい二階が全員の午餐場に當てられる。儀式拔きの會食で各國の代表が入亂れて席を占めた。老人は黑い服をつけて儀式張つて居るが若い人々は背廣の輕裝である。何しろ大變な人數なので舷々相摩する有樣で隣席同志は忽ち話がはずむ。到る所に國際的の親善風景が展開されて居る。名刺を交換する者，久濶を敍する者，ボーイが大會事務所から參加員に配布された食券を集めて廻る。料理は例に依つて鹽辛い牡牛の尾を煮だしたス



第 5 圖　ヂンクト・パウリの塔　（著者）

ープと舌鰈のフライと新馬鈴薯で獨逸特有料理である。メニューにはモーゼル，ライン，ボルドー，シヤウム等の酒のリストが付いて居る。皆思ひ思ひに選んで杯を擧げて健康を祝し合ふ。

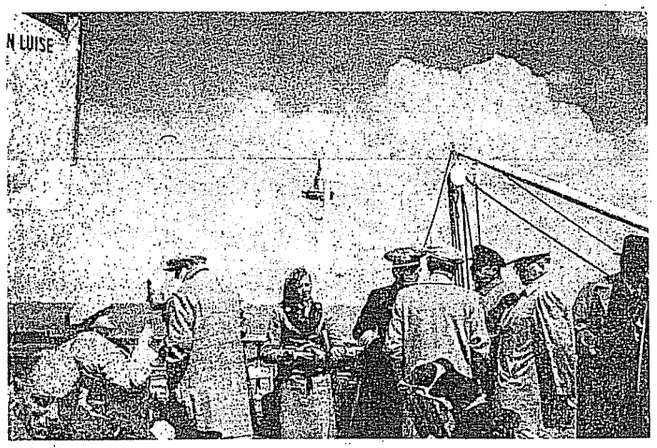
1時過ぎ賑かな會食が終つて散會して時迄1時間自由行動となる。寫眞機を持つて埠頭に出るとエルバ河には多數の船が浮び岸には造船所の煙が空を覆つて居る。純白の一巨船が新しい船形を午後の陽に輝かして群鷄の中の白孔雀の樣に靜かに碇泊して居る。KdF艦隊の旗艦ロバート・ライ號である。國家社會主義協同體「喜びに依る力の部」(Kraft durch Freude 略して KdF)が國民を北海や伊太利方面迄休暇旅行に送る爲に持つて居る KdF 艦隊の旗艦として去る3月24日ホワルヅ造船所から KdF に引渡され，ヒツトラー總統は戰艦テイルピツツの進水式にはウイルヘルムスハーフエンから多數の國民と共に此の船に乘つてヘルゴランド島經由漢堡迄の遊覽航海を行つたのである。5月16日には獨逸の技術者を乘せてノールウエー巡航を行つて居る。今見るロバート・ライは成程獨逸の誇る新造船として恥しくない立派な船である。總噸數 27,288 噸，實噸數 17,762 噸，全長 203.80 米，全幅 24.0 米，8,800 馬力のデイゼル電氣推進式で速度 15.5 浬である。262 個のソフアーを含んで 1,766 人の乘客を入れる階級無しの客室を持ち，503 人を容れる劇場，長さ9米，幅 5.6 米のプール，ダンス場を持つた 624 人を容れる大廣間を設備し，醫療室其他一般老幼男女を何んの不安も無く樂しい航海をさせるべくあらゆる設備が完備して居る。



第 6 圖　ルイゼ女王號

旗艦ロバート・ライの下には總噸數 25,484 噸のデイーゼル船ヴイルヘルム・グストロフ號，更にスツツトガルト，デア・ドイツチエ，シエラ・コルドバ，オツエアナ等の 20,000 噸級の船 5 隻があつて，これ等が KdF 艦隊を構成して居る。1938 年度には之等の艦隊に依つて伊太利，ノールウエーの遊覽旅行が行はれたのである。紀元 2600 年を期して東京に行はれる筈であつたオリ

第 7 圖　エルベの下流　（著者）

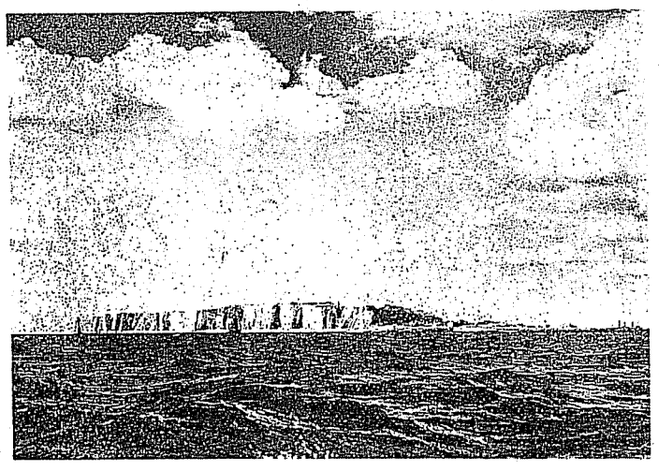


第8圖　ルイゼ女王號の甲板にて（著者）

ムビツクには之等の船が選手と數萬の國民勤勞階級を乘せて我國に來航する筈であつた。然し之等の船も一朝戰時には忽ち軍隊輸送船或は病院船となつて後方勤務に從事するのである。スペイン戰爭の際は之等の船は獨逸義勇軍コンドル部隊の送迎に使はれ，ポーランド進攻の時には東海から獨逸の兵士をポーランドに輸送し，今度の大戰には始めの3隻は病院船となり，他の2隻はラトビヤ及びエストニヤの獨逸民族の移送に使用された。實に和戰兩用の構へである。和戰兩用の構へは之のみではない。ドナウ KdF 艦隊と稱して既に十數隻の川船がドナウ河に浮べられ，平時は國民のドナウ河遊覽に使用され，戰時には武裝されてバルカンの物資輸送が行はれるのである。KdF は此の外に國內遊覽の爲に多數のバスを備へて居る。

獨逸の周到なる計畫の一部と其の恐るべき國力を此處に見る思ひがして我々は飽かず此の巨船を眺めて居たのである。

やがて3時となつてブローム・ウント・フオス造船所見學の爲にザンクト・パウリ埠頭に集合した後，2隻の汽船に分乘して濁つたエルベを渡つて對岸の造船所埠頭に着いた。造船所は何處も汚い。鐵錆と油にまみれた道をレールを袴いで歩く氣持は造船所らしい氣もする。獨逸有數の造船所だけあつて，ドツクも相當なものである。建造中の漢堡・アメリカ汽船會社の 35,000 噸の客船へ案內される。細い板のステツプを踏んで上甲板に上るとさすがに大きい。ブローム・ウント・フオスの飛行機工場は近い筈であるが一向にそれと判らない。外鈑は縱の繼目は全部熔接で橫の繼目だけが鋲接である。昇降口から下の甲板に下りるとフレームも熔接である。上甲板で說明を聞いてから再び赤錆びた水を下に眺め乍ら危げな道板を下る。



第9圖　ヘルゴランド島

現圖場からフレーム類の組立場に入るとフレームのフランヂとウエブを熔接で組合せ之を現圖に合せ機械で曲げて居る。

流石に熔接構造の發達した獨逸だけあつて之等の作業は興味が惹かれる。ブローム・ウント・フオスの飛行機の大膽なアエロ 70 銅製熔接構造も此の細かい作業を見て居ると其の發達の經路も窺はれる氣がする。

再び汽船でエルベを渡つてザンクト・パウリに着く。タクシーで驛に行つて荷物を取つて豫て割當てられたアルスター池の畔りのストライト・ホールに落付く。連れの2人は隣室に，私の部屋との間には共同のバスがある。代り合つて風呂に浸り，部屋着の儘で集つて今晩の夜會に出るかどうかを相談する。皆疲れて居て元氣も無く正裝に着換へるのも面倒とあつていつそ漢堡の日本料理屋に行つて故國の味覺を樂しむ事に衆議一決して心が輕くなる。

夕暮れのアルスター池畔の散策は我々の旅情を慰めて呉れた。獨逸の何處の町にもあるアドルフヒツトラー廣場から池を半回して市中の樣子を見る。獨逸の都會とは云ひ乍ら漢堡は矢張り港町である。風俗も商店の飾窓も他國の空氣がにほつて居る。

地圖を見乍ら日本料理店に辿り着く。此處は又伯林の日本料理店と異り住宅地に在つて全てが整つて美しく飾られて居る。主人が出て來て歡迎して呉れるのもうれしく，魚も伯林より遙かに上等である。日本料理が三軒もある伯林を發つて來たのは今朝であるとは思はれない程故國の風味を待望して居るのも外國の旅のせゐであらう。

長い夏の日も暮れた9時過ぎには我々は此處を出て電飾まばゆいザンクト・パウリの繁華街を散策した。偶然日本字を書いたレストランを見付けた。一同一杯のビールを傾けて再び故國の人と話をするのを樂しみにしたのであつたが，此處は主人も入つて來た日本人の船員も我々を敬遠して橫目で見ただけであつた。

14 日の朝は再び晴れて輝かしい夏の陽が大氣に滿ちて居た。旅裝を備へて大型バスで再び埠頭に着くと，既にハーグの海水浴遊覽船「ルイゼ女王」號は滿船飾を施して我々を待つて居た。7時半我々の船は埠頭を離れてエルベの流れを下つた。左岸はブローム・ウント・フオス造船所を始め大，小の造船所が櫛比し，黑白樣々な煙をあげ，沿岸の埠頭に立並ぶ多種多樣のクレーンは空を摩して物凄い許りである。漢堡の埠頭を歩けば全ての種類のクレーンが見られると云はれて居るのも尤もな事とうなづける。右岸にはザンクト・パウリの塔が線に圍まれて屹立し，所々に水浴客の休む籐製の更衣所が見える。河は往來の汽船で賑つて獨逸第一の港にふさはしい情景である。左岸に水上機の格納庫を見る頃には兩岸はいやが上に開けて，岸は低く，「母」エルベに養はれる廣茫たる沃野が一望の彼方迄伸びて地平線の上には白雲を點綴した蒼穹が廣く擴がつて來た。

我々の目ざす所は「線の野原と赤い絕壁と白い砂」で象徵される憧憬のヘルゴランドを經て北上し，獨逸最北部のシユレスウヰツヒホルスタインの西岸に沿つて線の如く南北に連なる地フリジヤ諸島最北端のジルト島である。而して此の北海の離れ島に獨逸第一の避暑地として知られるウエスターランドを訪れ，大會參加者の歡喜を增さうと

云ふのである。

エルベの流れに映る白雲を友とし，靜寂な船旅を續ける事2時間半，遂に我々はエルベ河口の小港クツクスハーフエンに着いた。灰色の砂原の中に此の漁港は生臭いにほひを發散して，北海の旅に出る我々の心を躍らせた。

參加者は何れも輕裝に着換へて太陽の光を浴びて甲板に出た。獨逸人の會員の主なる人々は云合せた樣に海員服に着換へ，金モールの着いた海員帽を被り，倍率の大きな望遠鏡を胸にして現はれた。

大部分の人は甲板にデツキチエヤを出して日光の少い國の人らしく太陽を貪り，毛布をかけて寢入つて終つた。子守唄の樣にエンヂンの響きが上甲板に傳はつて來る。眠らないのは軍服の獨逸海軍の軍人と大會の役員のみである。佛蘭西人の苦情を聞き乍ら生ハムとアスパラガスの晝食を喰べ終り食後の音樂を聞いて居る頃には，我々のスマートな女王は水天髣髴の彼方に斷雲に覆はれたヘルゴランドの片影を望見した。

午後4時待望のヘルゴランドに着いた。北海の波の上に忽然として屹立する赤土の絶壁には，所々に白い土層を混へて繪畫的の美しさを見せて居る。絶壁の上を遙かに見上げれば其處には絶壁の緣迄赤屋根の家が，白い燈臺が，そして褐色の壁の兵營と黑い無線塔が所狹き迄立並んで居る。碧く澄んだ水を亂して大型のボートを默々として漕いで船客を收容して行く黑い帽子の逞しい舟手は何と無くレ・ミゼラブルの勞役者を思はせて，晴れた日には斯くも美しい孤島ヘルゴランドが一度北海の暴風雨に見舞はれる時の凄慘な半面を語つて居る樣である。

獨逸人のみ上陸を許される。彼等は嬉々として孤島に海水浴を樂しむべくボートの上から手を振つて離れて行つた。ヘルゴランドのみは獨逸領内に許された唯一の純毛服の購買地である。ヘルゴランドが獨逸國防上の要衝である事は云ふ迄も無い。右には海の中を遙かに防波堤の築造中であり，直下58米の絶壁の下に僅かに殘る白砂の上には，護岸工事が大規模に進められて居る。港の中には小艦艇が繫留され，獨逸海軍の使用する高速曳航標的艇が波間に跳つて居る。

第一次歐洲大戰の英國驅逐艦のヘルゴランド攻擊は有名なものであるが，ベルサイユ條約に依り全ての砲壘は破壞されて終つた。今や獨逸は西方500粁の彼方に英國を望んでヘルゴランドの再軍備に忙殺されて居るのである。

30分の碇泊の後に「ルイゼ女王」號は再び北に向つた。會員が船の旅に單調を感じ，充分な眠りをとつた頃，一同に T.M. フオイト機械會社から，フオイト・シユナイダー・プロペラの型錄が配布された。封筒に入れて1人宛名前をタイプした立派な物である。實に拔目の無いやり方である。然し此の型錄のお蔭で30分以上は凌げた。

大會の始めのプランは此のプロペラを付けた「ヘルゴランド」號に乘り，北海を巡航し乍ら，フオイト・シユナイダー・プロペラの効果を會員に見せ，其の講演がある筈であつたのが，故障の爲に急に「ルイゼ女王」號に變つたのである。アクラムの島を右に見て，愈々我々の北海巡遊の船旅の終點であるジルト島のホルヌムを見たのは5時半であつた。

ドルニエ 18 型飛行艇が波をかすめて低空飛行を行つて居る。此處には獨逸空軍の飛行基地があるのだ。

午後6時1日の船旅を終つてジルト島の砂原の小村ホルヌムに上陸した。赤い燈臺が砂丘の上に立つて居る。棧橋を渡つた所にはウエスターランドまで我々を運ぶ輕便列車が煙を擧げて待つて居た。